The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	衣服に現れる怪異 ： 「襟」と「裾」の考察を中心に
Author(s)	松村, 薫子
Citation	日本語・日本文化研究. 2016, 26, p. 28-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/59664
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

衣服に現れる怪異
ー「襟」と「裾」の考察を中心にー

松村薫子

はじめに

我々が普段着用している衣服は、着用するという機能的側面だけでなく、衣服の形や素材、着装法で、着用者の考え方を表現したり、文化や宗教性、職業を表現したりする。衣服は、人間の思想が反映されたものであり、民間伝承においても、不思議な現象とともに語られることが多い。ゆえに、民間伝承のなかで衣服にどのような想像力をもって意味づけを行っているのかについて分析することは、日本人の考え方を明らかにしていく上でのひとつの手掛かりとなると思われる。

衣服にまつわる民間伝承の研究は、これまで主に国文学や民俗学の分野において羽衣伝説を研究するものと衣の俗信に関する研究が中心的に行われてきた。羽衣伝説研究は、水野祐『羽衣伝説の探求』（1977）のように、各地に伝わる羽衣伝説の起源についての考察が中心である。また、衣の俗信については、主に衣服史や民俗学、人類学の分野で研究が行われており、井之口章次『日本の俗信』（1975）のような俗信研究の一部として取り上げられてきた。それらはあくまで他の研究テーマのなかの一部として取り上げられたものであり、民間伝承における衣服の怪異譚についての体系的な研究や、素材や形状などに関する伝承など細かい点を掘り下げる研究は行われていない。しかしながら、日本人の考え方を明らかにしていく上で、日常生活と関わりの深い衣服についての民間伝承を体系的に研究していく必要があるのではないかと考える。それゆえ論者は、衣服についての民間伝承を体系的に研究するための基礎作業として、可能な限り集めた衣服に関する民間伝承を内容の特徴から分類する作業をかつて行ったことがある。その分類については、「괴이전승에서의 옷-「소매」의 의미와 관련하여-（怪異伝承における衣ー「袖」の意味をめぐってー）」（2016）においてまとめている[1]。そこでは、衣服についての民間伝承を、「①霊験がおこる話、②衣を貸す、与える話、③人間に化ける話、④羽衣伝説、⑤幽霊や妖怪の衣の話、⑥襟、袖、裾、帯にまつわる怪異譚」の６種類に分けた。この分類を行った際、「⑥襟、袖、裾、帯にまつわる怪異譚」の「襟」「袖」「裾」といった衣服の特定の部分と怪異伝承が関わっているという点が、衣服の民間伝承において特徴的であるということがわかってきた。衣の特定の部分に怪異が発生するという点は、日本人の衣服に対しての想像力や意味付けのしかたを考えるうえで、非常に重要なものであるように思われる。そこで、まずは「袖」についての民間伝承を中心に考察を行うことにした。その考察については、先述する拙稿においてすでに述べている。この考察から見えてきたことは、日本人

は衣服の「開いている」点に対して「異界とつながっている」という想像があったのではないかということであった。つまり、その想像があるゆえに、袖に妖怪が入り込んだり、呪術的な力があるという意味づけになっているのではないのかということである。しかし、衣服で「開いている」部分というのは、当然のことながら「袖」だけではない。「襟」と「裾」も同様に開いている部分である。「袖」について考察した際には、「襟」と「裾」についての考察を行うことができていなかったが、衣服の「開いている」部分が「異界とつながっている」という意識が「襟」や「裾」にも同様にみられるのかについての検証は必要であると思われる。ゆえに、本論文では、「襟」と「裾」についての考察を行い、「開いている部分」に「異界とつながっている」という想像が「袖」と共通してみられるのか、あるいは「袖」と異なる意味づけがあるのかという点についての考察を行いたい。

第１章　民間伝承における「袖」の意味について

怪異伝承における「袖」の意味については、先述するようにすでに「괴이전승에서의 옷-「소매」의 의미와 관련하여-（怪異伝承における衣－「袖」の意味をめぐって－）」（2016）においてすでに述べている。しかし、それは韓国語で刊行されており、日本語版は刊行していない。本論文で「襟」と「裾」についての考察を行うにあたり、「袖」の意味についての考察内容をおさえておく必要があるので、日本語版での論考をここに記しておきたい。

「袖」の意味については、万葉集に「袖振る」を使った歌が多くみられるため、主に国文学の分野で研究が行われてきた。折口信夫は、袖の意味について、「袖も領布も呪術の布として用いられてゐる。思ふ人に向つて振ると、その霊魂が招かれて寄り来る」［折口　1951：215］と述べ、袖は「呪術の布」として用いられ、袖を振るのは、相手の魂を自分の方へ呼びよせる「招魂」の行為であるという説を唱えている。この「袖振り」の意味については、その後の研究においても、折口説が広く支持されている［奈良　2001：3］。

また、民俗学の研究では、「袖もぎさん」を研究した中山太郎と堀三千、着物の袖の習俗について研究した金子緯一郎の研究がある。中山は、「袖もぎ」信仰の正体を考察したが、折口が自分と類似の結論を出したということで、折口の見解をもって結論としている。その結論は、袖モギさんの場所で躓いて倒れることは、守護の怒りや凶事の予兆なので、免れるまじないとして、かつて道で行き倒れた人の死霊を恐れて衣服を掛けたことにならい、片袖を解いて手向けるようになったのであろうというものである［中山　1942：74-75］。堀は、「袖もぎさん」信仰について、中山、折口の説を紹介しながら「片袖」の意味について考えているが［堀　1982］、新たな説は提示していない。金子は、習俗における袖の考察から、袖を振ることによって人の魂を招き寄せる呪術力があることや、着用者の魂が

籠るものと信じられていたことについて述べている［金子　1993］。

これらの国文学や民俗学の先行研究において示された「袖」の意味は、「招魂」、「呪術的」という二つのキーワードにまとめられるだろう。「袖」は、民間伝承においても、袖を振って火事にならないように守るとか、僧侶の袖で醜い顔を拭いたら美しくなったというような話が見られるので、確かにそのような意味も含まれる。しかし、日本人の考える「袖」の意味をこれで結論づけてしまうのは、いささか早計であるように思われる。それは、「袖」についての伝承を詳しく見ると、「招魂」、「呪術的」とは異なる意味も見いだせるからである。また、「呪術的」と一括りにされる話も様々なケースがあるので、もう少し深く掘り下げて考察する必要があると考えられる。ゆえに、以下より、民間伝承において語られる「招魂」、「呪術的」とは異なる「袖」の伝承をもとに、日本における「袖」の意味について考えていきたい。

袖に関する伝承は、様々なパターンがみられるが、怪しい者の正体を見ぬく際に袖に針を刺して跡をたどるという伝承が見られる。

> 比婆郡高野町餅の実の鉄山師の娘まきの所へ毎夜美男が訪れる。乳母は、その男の袖先に糸を通した針をぬいつけて帰した。翌朝その跡をたどっていくと、男は森脇の黒石山の洞の中で、鉄気に当って死んでいた。娘は間もなく出産するが、盥一ぱいもある蛇子だった。［広島県史　1978：1231］

「袖」に糸を通した針を縫いつけて跡をたどっていったところ、男は鉄気に当たって死んでいた。娘が産んだのが蛇子であったことから、男の正体は蛇であったということがわかる。袖は、このような「正体を見破るため針を刺す部分」なのである。また、正体を見破るだけでなく、「怪異・妖怪が袖から出現する」という話がある。

> 貧しい者に高利の金を貸し、質物に田畑を巻き上げて大金持ちになった弾三郎という者があった。ある時、貧乏人の女房が着物を質に金を借り、のちに返しに行く。弾三郎は期限切れを理由に着物を渡さない。女は亡き母の形見ゆえ返してくれと泣いて頼むが断られる。女は間もなく病死する。翌年弾三郎が蔵を開いて虫干ししていると、質物にとった着物の袖から痩せ衰えた女の腕が出て、だんだんのびて来て弾三郎の顔を撫でたので気絶する。弾三郎はそのまま病死し、続いて家内残らず死に絶え、屋敷跡は田になり手倉田と称した。［宮崎県史　1956：295］

袖から女の腕が出てきたという恐ろしい話である。このような幽霊の手が出てくるという話以外にも、袖を引っ張る妖怪の話がある。

昔、夕暮上廊の邊を通ると後から袖を引く者がある。驚いて振返ると誰もゐない。歩き出すと又袖を引かれる。誰ともなく袖引小僧といつた。［川越地方郷土研究　1938：208］

袖を引っ張る妖怪を「袖引小僧」という。袖は、幽霊の手が出たり、袖引小僧に引かれたりすることから、怪異が発生したり、妖怪が入り込む部分として考えられているといえる。

狐持には先祖よりの狐持と、山の狐を頼んだのが其儘居附いたのと、賭博場等で人の著衣などを剥いで戻つたが、其袂に狐が隠れて居て其儘居着いたのとあるそうです。尤も袂の中に居たといふのは狐ばかりではなく、犬神もトウビヨウもあります。［下村　1922：267］

袖の袂には、狐、犬神、トウビョウといったいわゆる「憑きもの」が居着くという。「袂」は、着物の袖で袋状になっている部分をさし、小さな物を入れることができる機能も持っている。そのためか、袂には様々なものが入り込むらしい。たとえば下記のような話がみられる。

クダに憑かれた病人は、一寸気遣いの人が見舞ったりすると、袖で顔を隠したり、よそを向いて返事をしないからすぐわかるという。これは変だと思って、早速に袂を調べてみると、案の定クダの毛が入っていた。［松村　1973：21］

袂は、狐などに憑かれたとき毛が入っているので、憑かれている状態であると気づくという。これらの話にみえるように「袖」は、妖怪や妖怪の毛などが入りこむ場所となっていることがうかがえる。これまで挙げた事例の考察から、袖は、「怪異・妖怪の出現に関わる」という意味がみられることがわかる。

また、「袖」は、「袖の下から覗く」ことにも意味を持っているようだ。その一つの事例として、下記のような話がある。

節分の晩には、三つ角に首切れ馬が走るといわれている。（中略）着物の片袖をかぶって見ると、首切れ馬が通るのがわかるという。［中岡　1977：21］

山芋掘りに行った人が、小さな穴から出てきた蛇を殺した。（中略）その日の夕方に家がゆれてきた。お婆さんが、魔物にやられていると言って着物の袖からお日様を透かしてみると蛇の形が見え、家を取り巻いていた。［民俗採訪　1959：110］

袖の下から覗くと妖怪が見えるのである。袖は、「異界の者と通じる窓」としての役割をもっており、妖怪やこの世のものでない光景を見るために「袖の下から覗く」という行為がしばしばみうけられる。日本の俗信について研究している常光徹は、「袖のぞき」のしぐさは「股のぞき」と共通する民俗的な意味があり、日常的ではないもの、つまり異界を覗き見るしぐさであることを指摘している［常光　2006：106-109］。また、「片袖を頭上にかざす、もしくは袖を被った状態は、妖怪や幽霊などの影響を遮断し、つまり自らの姿を覆い隠した上でそっと相手を覗き見るしぐさであろう」と、魔除けの効果につながる点についても述べている［常光　2006：108］。

上記の考察から、「袖」には、「①怪異・妖怪の出現に関わること」と「②異界を覗く窓となっていること」の２点の意味がみられることがわかる。身体と怪異伝承の関係を研究している安井眞奈美は、鼻孔や肛門といった身体の開口部が妖怪や悪霊の侵入口とみなされていたことを指摘し、指の間や脇の下などの普段閉じられている部分も開かれて二股となり空間ができることで妖怪や悪霊が攻撃するという点を述べている［安井　2014：205-234］。身体の開口部や開かれる空間といった「開いた」部分に、怪異や悪霊が関わってくることを考えると、衣の「袖」の開口部もやはり、怪異や悪霊などの異界の者の侵入口、そして異界を覗き見ることのできる窓として認識されているように考えられるのである。

怪異伝承における「袖」の語られ方から、「袖」は「異界とつながった部分」と考える日本人の想像力がみえてくる。日本人は、袖の「開いている」部分について、「妖怪や異界と通じる」部分であると考えたのではないだろうか。このような、「袖」などの「開いた部分」に「異界を感じる」想像が、袖に呪術的な力を見出すことにつながっているのではなかろうか。

第２章　民間伝承における「襟」の意味

上記が拙稿において述べた「袖」についての論考である。「袖」において見出された「開いた部分」に「異界を感じる」想像が呪術的な力を見出すことにつながっているという点は、「襟」においても同様なのであろうか。それを見るために、以下より民間伝承における「襟」の意味について考察を行う。「襟」については、たとえば下記のような伝承が見られる。

> 祖先に美しい乙女がゐて、その女に容貌秀麗な男が夜々通つて来る。乙女は父母に秘して楽しい会合を重ねてゐると、何時しか懐妊する。詮方盡きて両親に明すと、今夜来たら糸を通して針を襟元に刺すがよいと教へる。でその通りにして、夜が明けてか

ら其の糸を辿つて行くと、とある洞穴の中に恐ろしい呻き声が聞える。覗いて見ると大蛇が頸を貫かれてゐた。大蛇の云ふやう、生まれる子は男である。そして背に鱗があつて、大きくなると口には牙が生へる、それが蛇の後裔たる徴であると云つて息が絶えた。それ故自分の家では代々背に鱗の形があつて、口には牙が生へると言伝へてゐる。鱗はないが、牙らしい歯は代々生へた。［松村　1914：23-24］

この伝承は、毎晩通ってくる怪しい若い男の襟に糸を通した針を刺しておき、糸をたどっていくと大蛇であったという話である。この伝承は、先述した「袖」の伝承と類似している。さらに、沖縄県宮古島市にも下記のような話が伝わっている。

平良（ピサラ）の住屋（スミヤ）に、美しい娘がおり、妊娠した。父母が驚いてたずねると、色白の清らかな青年が夜々、寝床へ来る、とのことであった。母の教えに従い、千尋の麻糸をつけた針を、娘は青年の襟にさしておいた。翌朝、糸をたどると、糸は戸の節穴から外に出て、漲水御嶽の洞穴へと続いていた。そこには、二、三丈もある大蛇がおり、頚に糸のついた針がささっていた。片方の目にささっていた、とする場合もあり、この場合は、それゆえ片目の蛇は、漲水の神だとされる。［原田　2001：45-46］

毎夜通ってくる青年の襟に針を刺したところ、その針が大蛇の頚（くび）もしくは片目に刺さっていたという話である。この話において注目すべきことは、「襟」は着物の一部ということだけでなく、大蛇の「頚」「片目」という身体の一部となっているという点である。化けた大蛇が着物を着て現れているのではなく、着ている着物自体も大蛇が化けた一部分なのである。

これらは、大蛇の正体を見破るという「襟」についての伝承であるが、人間が着ている着物の「襟」についての伝承もみられる。

つい近年のこと、この格子戸の中から真赤な手が、ニュット出て、知らないで後むきになつてゐた人の襟もとをつかんださうだ。［高柳　1943：38-39］

この伝承では、人間が着ている着物の「襟」を真っ赤な手が掴むという話である。この話以外にも、妖怪が人間の「襟」をつかむという話がみられるので、「襟」は妖怪などの怪しい者がつかむ部分であることがうかがえる。先述する「袖引小僧」とも、「妖怪がつかむ部分」となっている点では共通しているといえる。また、襟をつかむだけでなく、下記の伝承のように、妖怪が何らかの行為を人間に対して行うときに「襟」の部分に対して行うことがあるようだ。

根白石村の興禅院は正徳年間までは朴沢山の中腹にあった。その頃、住職が夕方読経する度に抜け首が現われ、襟首を冷たい舌で舐める。和尚は修行が足りないからであろうと、なおも読経をつづけたが、ついに寺を現在の場所に移転した。ところが村の人が炭焼きで朴沢山から帰る途中、もとのお寺跡のところで抜け首に出あい、気を失わんばかりにおどろいて家に逃げ込んだが、熱をだして三日目に死んでしまった。その人の孫は現在も同所に住んでおり、また興禅院の現住職もよくこの事を知っている。［宮城縣史　1956：502］

興禅院の住職が読経をしているとき、「抜け首」に襟首を舌で舐められたという話である。これらの伝承にみられるように「襟」は、つかまれることも含め、妖怪に攻撃をされる部分だということである。先述するように、「襟」は、「妖怪の身体の一部」であり、「妖怪から攻撃される部分」であることから、妖怪などの「怪しいものと関わる部分」として認識されているといえるだろう。このように「襟」が怪しいものと関わる部分という意味づけがあるためか、「襟」に関する下記のような呪（まじな）いも伝えられている。

妊婦は葬式の行列に参加してはいけない。参加すると子が流れる。どうしても行かなければならない場合は、鏡を持つか、着物の襟に縫針を逆さに刺して（針先を下に向けて刺して）行かなければならない。［成城大学民俗調査報告書　1986：67］

着物の襟に縫い針を通常とは逆の向きに刺すことにより、子が流れるという「魔」から遠ざけることができると考えられている。呪いで、日常使うものを通常の使用方法とは逆にして使うということは、しばしば見受けられるので[2]、針を逆に刺すということはその意味からであろうが、「襟」に刺すことで「魔を遠ざける」ことができるというのは、先ほどの「襟」が妖怪などの「身体の一部」とつながっている点とも関連があるように思われる。さらに、襟についての禁忌に下記のような伝承がある。

たとへば妊婦が着物の衿に針を刺して置くと、耳べらに穴のあいた児が生まれるといふことを、和歌山県の高野口の町附近でも謂へば、又遠く隔たつた秋田県の山本郡でも謂つて居る。［柳田　1942：8］

妊婦の着ている着物の襟に針を刺したままにすると耳たぶに穴が開いた子供が産まれるという。この禁忌は、着物を縫う際、最も危険な首に針が残っていて刺さることがないよう注意をうながすためもあると考えられるが、襟が赤ん坊の耳になぜ対応しているのかという点については今後考える必要があるだろう。また、下記のような俗信もある。

重い病人が夢中で着物の襟を掻く様になると近い内に死ぬ［中山　1933：53］

襟を掻くようになると死の予兆だという伝承は、襟が、死の世界である「あの世」の入り口のような認識が持たれているためなのではないだろうか。同様に、死の予兆について下記のような伝承がある。

臨終まぢかに病人が、それらの清水を望むようになると、昔はよく逆さにはうシニジラメが襟のあたりにたった。白い平たいシラメで、じゅずつなぎにたち、とってもとってもたつので、ホウキではいてやったものだという。逆さまに尻を上にして、襟のあたりを中心にはうのでサカサジラメともいった。そして病人がその襟のあたりをかくようになると、その人は助からぬといった。病人が目をきると、そのシラメやマミヤの中のシラメがどことなく姿を消したという。［新潟県史　1984：187］

この伝承においても、「襟」という部分に「シニジラメ[3]」が立つということが「あの世」へ行くということを示している。これらの襟と死の予兆とのかかわりは、襟が「あの世」とつながる部分として意味づけられていることを示しているのである。

ここまでの考察から、民間伝承における「襟」は、「①妖怪の身体の一部分」、「②妖怪から攻撃される部分」、「③あの世とつながる部分」として意味づけられていることがうかがえる。「襟」という部分も「袖」と同様に、「妖怪」などの怪しいものが入り込む部分であり、あの世などの「異界」と関わっている部分であると考えられているのである。このことは、奄美のノロの装束について研究した川野和昭が、奄美のノロ装束の「襟」が一目おとし（1点鎖線の縫い）で縫われている点について「襟から侵入しようとする悪霊を払おうとする意識が読みとれる［川野　2012：73］」こととも関連しているように思われる。

第３章　民間伝承における「裾」の意味

「裾」は「袖」と同様に、『万葉集』や『古今和歌集』などの和歌で「裾」ということばが詠まれており、「袖」に比べれば数は少ないものの、国文学において「裾」という言葉の意味についての研究が行われている。「裾」の意味についての先行研究としては、畠山大二郎「『源氏物語』の「衣の裾を引きならいたまふ」－「少女」巻における夕霧の懸想を中心として－」（2016）がある。畠山は、『源氏物語』「少女」巻の「衣の裾を引きならす」という表現について、『古事記』、『万葉集』、『古今和歌集』などの『源氏物

語』以前に使われる「裾」も含めた考察を行い、「裾」が、恋人と逢えないなどの男女の隔ての象徴とされている点、隙を生み出しやすい点、があるということを指摘している［畠山　2016：87-92］。また、「裾を引く」行為は、求愛行動の一つの所作であるが、自らの思いを突発的に訴える「袖を引く」行為に比べると、男女の隔て・障害を越えようとしながら接近を試みる段階的な方法であるとする［畠山　2016：100］。『源氏物語』「少女」巻で夕霧が惟光の娘の衣の裾を引きならしたのは、衣の裾を引くことにより、自分の存在を気付かせ注意を向けさせようとした行為であるという［畠山　2016：105］。つまり、古典文学における「袖」には、「男女の隔て」、「隙を生む部分」、「接近する行為」という意味があるということになるだろう。

国文学における「裾」の意味が考察される一方で、民俗学や衣服史では、「裾」の意味を探る研究はほとんど行われていない[4]。しかし、民間伝承において、「裾」に関する伝承は、袖と同様に様々なパターンがみられるので、民俗学においても「裾」にどのような意味があるのかについて考察する必要がある。

「裾」についての伝承のうち、最も多いパターンは、「襟」や「袖」と同様に、怪しい人の着物の裾に針を刺して正体をつきとめるという話である。

> 昔、美男の侍が村の娘の処に毎夜通って来ていた。娘の母親のばあさんがこの男の素姓を尋ねると、娘は知らないというので、ばあさんは娘に教えて、男の帰るときにその着物の裾に糸を付けた針をさしておいた。翌朝その糸をたどって行って見ると、九鬼のクルシマという大岩の下の穴の中へその糸の端が入っている。そこで、その岩穴のそばに行くと、穴の中から声がして、「頭にかねを刺されて、もう助からんわよ。子供をつくっておいたけど」ということであった。［近畿民俗　1985：297-298］

先述した「襟」や「袖」と同じパターンの伝承である。「襟」で示した伝承と同様に、裾につけた針が喉に刺さった状態で大蛇が出てくる話や、頭に針が刺さって助からないと語る話がみられることから、着物の「裾」も妖怪の身体の一部であるようだ。

また、「裾」は、川を渡るときや用を足すときなどにまくり上げるものであるが、「裾をまくる」行為は、狐などに化かされた状態と関連するようである。

> 夕方、北原の蕎麦の花盛りの畠の中を、着物を尻までたくつて、深いなァ〳〵と歩いて居た。松本帰りの人で油揚げを皆喰はれてしまつて居た、と言ふ。［小口　1931：32］

狐に化かされた人が、畠が川に見えて、着物の裾を尻までまくりあげて「深いなぁ」と言いながら歩いており、気付くと油揚げを食べられてしまっていたという話である。化か

された状態になっている人は「裾をまくりあげている」のである。この点については、さらに次のような伝承もある。

> 桜小路のお六という女ぎつねが、ほうりざわ（祝沢）を通って上町へ向かう桜小路と呼ぶ道すじにいて、人々をばかしたという。ほうりざわを渡って買い物に行こうとした人が、急にザーザーザーと水の流れる音がして、「おかしいなあ、こんな所に水の流れる川があるわけはないが」と思った。しかし、あまりにも水が流れてくるようで、しりっぱさみをして、着物をはしょって「深い、深い」といって歩いていたところが、向こうから人が来て、「おめさん、何をやってるだ」といったが、まだそれでも気がつかなんで、背中をたたかれて、やっとしょうがついて、それで周りを見回したら、ただの道を歩いていたとのことだ。［長野県史　1990：494］

通常、川を渡る、用を足すなどの必要性がある時以外は、着物の裾をまくるという行為はしないものである。ゆえに、何もないときに着物の裾を尻までまくって道を歩いていれば、すでに大変奇妙な状態であるといえる。これらの伝承では、「裾をまくって歩いている」という状態は、妖怪に化かされた状態で正気ではない状態にあることを示している。

また、妖怪も裾をまくっている状態で現れることがあるようだ。

> そこは、昔からマヨナムンのよく立つ所だと言われている所で、雨のシトシト降る時に歩くと、着物の裾を端折って、風呂敷包を肩からななめに縛り、風呂敷をかぶり、さわり（もすりん）の赤いしむたん（腰巻）、青いしむたんをしている女が通る所だ［田畑　1976：21-22］

マヨナムンは、裾をまくって現れるという。これらのように「裾をまくる」という状態は、人間であれば「化かされていて正気ではない状態」を示し、妖怪であれば、妖怪であることを判別する目印ということになるだろう。このような「裾」についての想像は、「裾をまくりあげる」という「大きく開ける」ことに異界、妖怪とのつながりを示しているのであろう。

このような異界、妖怪とのつながりに「裾」は関連している。そのためか、衣の裾については下記のような俗信も伝えられている。

> 物貰いが上マブチにできた時は、着物の上前の裾を、下マブチにできれば下前を糸でゆわえておき、治るとそれをとく。［草川　1957：11］

裾の俗信は、ものもらいを治すというような、よい効果が期待されている。つまりこの

俗信から見えることは、裾という部位が、日常とは離れた世界とつながっていると考えられているということである。裾が単なる裾ではなく、異界とつながっている部分という認識があるからこそ、裾に何らかの行為をすることによって不思議な力がおこると考えられている。

これまでの考察から、民間伝承における「裾」は、「①妖怪の身体の一部」、「②異界とつながっている部分」として意味づけられていることがうかがえる。つまり、裾をまくって「開いた状態」になっていると、異界とつながったり、妖怪などの魔が入り込んだりした状態であるということになる。厠からカッパの手が出てくる伝承［影山　2002：112-113］も、用を足すときに裾が「開いている状態」が、妖怪などの異界のものとつながる状態にあるということを示しているのではないだろうか。裾が通常どおり「閉じて」いれば、異界とつながることも、妖怪などが入り込むこともないのである。「袖」や「襟」と同様に「裾」も、「開いている」点が重要であると思われる。

おわりに

本稿では、衣服に関する民間伝承のうち、「襟」と「裾」に注目して考察を行った。以前行った「袖」の考察も含めて、３つの衣服の部分に関する民間伝承で共通して見られるパターンは、「針や糸を刺して蛇や龍の正体を見破る」というものである。「袖」、「襟」、「裾」いずれの部分においても、針が刺さったことにより、蛇などが死ぬという伝承となっており、「妖怪の身体の一部」とも関連づけられていることがうかがえる。また、「妖怪が攻撃をしかけてくる場所」としても関連づけられている。さらに、「袖」、「襟」、「裾」は、先述するように「開いている」という点が重要である点も共通している。「襟」と「裾」も「袖」と同様に、「開いている」ことで、「異界とつながって」いると考えられ、それゆえに妖怪などの外部からの何かが「入り込むことができる」と考えられているということである。今回の「襟」と「裾」の考察を通して、「袖」と共通した認識が見られるということが明らかになったかと思う。

これらの「開いている」部分とは反対に、着物の「縫われている」部分や「閉じている」部分については怪異や妖怪などが入ってくる伝承は管見のかぎりほとんど見られない。つまり、「開いている」と「異界とつながる」ので、「妖怪」や「魔」などが入り込むようになり、「閉じている」と入り込まないということのようである。「裾」の伝承においても、「裾」をまくり上げていると「異界とつながっている」状態であるが、「裾」を下ろして「閉じて」いるときは何も起こらないのである。

このように日本人は、「開いている部分」に「異界とつながっている」「妖怪や魔が入り込む」というイメージを持ってきたために、人が生きているうちは妖怪や魔が入って魂

が抜け出ることがないよう防いだり、逆に、亡くなった場合は魂があの世へ行きやすいようしたりする習俗を行ってきた。その一例として、子供の「背守り」がある。子供の着物の背中に鶴や亀の刺繍を縫い付ける背守りは、魔除けのためにつけられたものである。背守りは、幼児の着物が大人の着物のような背縫いをせず一枚で仕立てるため、縫い目がなく、そこから「魔」が入りやすいと考えられたことから、「縫う」ことで着物を「閉じ」て、「魔」を入らせないようにしたと考えられる。医学が進歩する以前の時代には、子供の死亡率が非常に高かったため、子供が無事に育つようにとの願いからこのような習俗を行い、子供の魂が抜け出る（亡くなる）ことがないように祈願したのである。

生きている者の魂を守るということとは反対に、亡くなった者については、魂が「あの世」へ問題なく行けるということが重視された。死者に着せる着物の俗信で、

> 背縫いを紋の處三寸位縫はずに開けて置く。そこから魂が抜け出すと言ふ。だから背縫の一寸でもやぶれた着物は魂が抜けると言って嫌ふ［伊藤　1940：5］」

といわれるのも、それを示していると考えられる。亡くなった者に着せる着物は、通常の着物とは異なり、背縫いをわざと一部開けることによって魂を抜け出しやすくし、「あの世」へ行きやすいようにしたと考えられる。

本論文の考察から、「袖」だけでなく「襟」、「裾」についても、「開いている」部分に「異界とつながっている」という想像がみられるということが明らかとなった。「袖」、「襟」、「裾」にまつわる様々な禁忌や呪いなどの俗信も、これらの「開いている」部分が「異界」や「妖怪」とつながっているという想像があるがゆえに、様々な話が伝えられてきたといえるのではないだろうか。

参考・引用文献

伊藤最子　1940「葬送習俗」『民間伝承』5巻9号
井之口章次　1975『日本の俗信』弘文堂
小口伊己　1931「信州松本在の狐」『郷土研究』5巻4号
折口信夫　1951「霊魂」『折口信夫全集』20巻所収（1967）
影山正美　2002「下条の河童と国王の橋姫－「前期」柳田国男の水神研究と関連させて－」『甲斐路』通巻100号
金子緯一郎　1993「着物の袖に関する民俗信仰」『桐生短大紀要』7号
『川越地方郷土研究』第4冊完結編　1938
川野和昭　2012「衣裳を通した災悪防除の思想の比較－奄美のノロ神装束とラオス北部の

民族衣装の意匠を中心にー」『国立歴史民俗博物館研究報告』第174集
『近畿民俗』101号　1985
草川隆　1957「恩方村所見」『西郊民俗』通巻3号
下村光　1922「石見地方の憑物」『民族と歴史』通巻43号
『成城大学民俗調査報告書』9号　1986
高柳正文　1943「バレロン化もの」『高志路』通巻102号
田畑英勝　1976「奄美物語　その1」『季刊民話』通巻8号
常光徹　2006『しぐさの民俗学ー呪術的世界と心性ー』ミネルヴァ書房
徳井淑子　1991「裾にまつわるエピソード：中世ヨーロッパの文学から」『SOEN EYE』5号
中岡之子　1977「阿波北がたの昔話」『西郊民俗』通巻81号
『長野県史　民俗編　中信地方　ことばと伝承』3巻3号　1990
中山太郎　1942「コホロギ橋と袖モギさん」西村真次編『現代叢書23　生活と民族』三笠書房
中山徳太郎　1933「佐渡島河原田町」『旅と伝説』通巻67号
奈良なぎさ　2001「『万葉集』における「袖振る」について」『かほよとり 』9号
『新潟県史　民俗2』資料編23巻　1984
畠山大二郎　2016『平安朝の文学と装束』新典社
原田禹雄　2001「三位一体の神（下）」『南島研究』42号
『広島県史　民俗編』　1978
堀三千　1982「片袖の俗信」『女性と経験』7号
松村薫子　2016「괴이전승에서의 옷-「소매」의 의미와 관련하여-（怪異伝承における衣ー「袖」の意味をめぐってー）」『일본문화의 전통과 변용（日本文化の伝統と変容）』민속원(民俗苑)
松村武雄　1914「三輪山式神婚伝説」『郷土研究』2巻1号
松村義也　1973「クダ憑きの話」『伊那』 通巻530号
水野祐　1977『羽衣伝説の探求』産報
『宮城縣史　民俗3』21巻　1956
『民俗採訪』昭和33年度号　1959
安井眞奈美　2014『怪異と身体の民俗学ー異界から出産と子育てを問い直す』せりか書房
柳田國男　1942「にが手と耳たぶの穴」『民間伝承』通巻85号

---

[1] 韓国語で翻訳刊行されている。

[2] 「家人が死んで怖さが激しいとき、死んだ人の着物を逆さに被せると治る［新潟県史 1984：802］」というように、通常の使い方ではなく、逆さまにして使うことがある。

[3] 「シラメ」は方言で「シラミ」のことをさすと考えられるので、死ぬ間際に現れる「シラミ」を「シニジラメ」とよんだものと考えられる。

[4] 衣服史の分野では、徳井淑子「裾にまつわるエピソード：中世ヨーロッパの文学から」

（1991）で「裾」について取り上げられているが、ヨーロッパの文学からの考察であり、日本の民間伝承からの「裾」に対する考察はみられない。